

和田東郭 医案③

肝気たかき人、体中を搔くなどすれば其のあと直ちに赤くふくれ上るものあり。やはり肝火の為す所なり。又平生皮膚に風疹を発する人あり、班を発する人あり、皆肝火のことなり。昔小児の背に六字の名号のあるを觀せ物にしたることあり。是も搔きて六字のあとを付けしものなり。摂州高槻近郷の一婦人、右の症を患うこと数年なり。豪農の女なりし故、諸方より聘らんとすれども、右の患ありて、或いは五日に一たび発し、或いは三日に一たび発するにより、皆辞して既に婚嫁の時を過ること四五歳に至り、治を予が兄公に求む。兄公 即ち柴桂湯を投じて全く愈ゆることを得たり。兎角、其の腹候よく合う時は、此の湯にて甚だ奇効あるものなり。予は今 或いは右の方をも用い、又は四逆散をも用う。何れもよく腹候を詳らかにして用うべし。又右搔きたるあとのふくれる症にも一種毒に因りて発するものあり。是は別に取りあつかうべし。